

ENGIMONO

日本の神々シリーズ



あめのみなかめし

天之御中主神

天之御中主神は天地開闢（かいびやく）神話で宇宙に一番最初に出現し、高天原の主宰神となった神。その名が示すとおり宇宙の真ん中に在って支配する神で、日本神話の神々の筆頭に位置づけられている。その姿はほとんど神秘的ベールに包まれている。



たかみむすび

高御産巢日神

造化三神。日本神話に登場する「支配・統治」の神。高木神（たかぎのかみ）という別名がある。別名の通り、本来は高木が神格化されたものを指したと考えられている。女神の要素を持つ神皇産霊神と対になり、男女の「むすび」を象徴する神であるとも考えられる。



かみむすび

神産巢日神

造化三神。日本神話に登場する「生命・生産」の神。高御産巢日神と対になって男女の「むすび」を象徴する神でもありと考えられる。本来は性のない独神であるが、造化三神の中でこの神だけが女神であるともされる。



うましあしかびひこち

宇摩志阿斯訶備比古遲神

日本神話に登場する「徴（かび）」の神。神名の「ウマシ」は良いものを意味する美称である。「アシ」は葦「カビ」は黴と同源で、醗酵するもの、芽吹くものを意味する。「葦の芽」に象徴される万物の生命力を神格化した神である。一般的に活力を司る神とされる。



あめのとこたち

天之常立神

別天津神五柱の最後に現れた神である。独神であり、現れてすぐに身を隠した。天（高天原）そのものを神格化した、天の恒常性を表した神である。



いざなぎ

伊邪那岐命

伊邪那岐は、日本神話に登場する男神。天地開闢（かいびやく）において神世七代の最後に伊邪那美とともに生まれた。伊邪那美命の兄であり夫。天照大神、月読命、須佐之男命などの神を生み出した。色々と説はあるが、「いざな」は誘う、「ぎ」は男を表す。



いざなみ

伊邪那美命

伊邪那美命は、日本神話の女神。伊邪那岐命の妹であり妻。別名 黄泉津大神、道敷大神。天地開闢（かいびやく）において神世七代の最後に伊邪那岐命とともに生まれた。色々と説はあるが、「いざな」は誘う、「み」は女を表す。



あまてらす

天照大神

天照大神は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の左目から生まれたとされている。皇室の祖神で、日本民族の総氏神とされ、太陽を神格化した神であり、皇室の祖神の一柱とされる。信仰の対象、土地の祭神とされる場所は伊勢神宮が特に有名。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。



すさのお

須佐之男命

須佐之男命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の鼻から生まれたとされている。海原を神格化した神であると考えられている。八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した暴れん坊の神様。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。



つくよみ

月読命

月読命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の右目から生まれたとされている。月を神格化した、夜を統べる神であると考えられている。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。



ひのかぐつち

火之迦具土神

神産みにおいてイザナギとイザナミの間に生まれた神である。火の神であったために、出産時にイザナミの陰部に火傷ができ、これがもとでイザナミは死んでしまう。その後、怒ったイザナギに十拳剣「天之尾羽張（アメノオハハリ）」で殺された。



あめのうすめ

天鈿女命

天鈿女命は、日本神話に登場する女神。岩戸隠れで天照大神が天岩戸に隠れて世界が暗闇になった「岩戸隠れ」に登場する女神。芸能の神様とされている。日本最古の踊り子とも言われている。



たじからお

手力男命

手力男命は、日本神話に登場する神。力の神、スポーツの神として信仰されている。怪力を持つというイメージのある手力男命は、昔から人々に人気があり、各地に手力男命が登場する神楽が伝わった。



ひるこ / えびす

蛭子命

イザナギとイザナミの間に生まれた最初の神。子作りの際にイザナミから先にイザナギに声をかけた事が原因で不具の子に生まれたため島から流されてしまう。蛭子神が流れていたという伝説は日本各地に残っている。蛭子と書いて「エビス」と読むことから、ヒルコとエビスを同一視する説が室町時代からおこった。



しなつひこ

志那都比古神

神産みにおいてイザナギとイザナミの間に産まれた神。風の神であるとしている。神名の「シナ」は「息が長い」という意味である。古代人は、風は神の息から起きると考えていた。風は稲作に欠かせないものであるが、台風などの暴風は人に大きな被害をもたらす。そのため、各地で暴風を鎮めるために風が神が祀られるようになった。



くくち

久久能智神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。木の神であるとしている。神名の「クク」は、茎と同根で木が真っ直に立ち伸びる様を形容する言葉とも、木木（キキ・キギ）が転じてクク・クグになったものともいう。「ククノチ」は「茎の神」「木の神」という意味。



おおやまつみ

大山津見神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。山の神であるとしている。「オオヤマツミ」は「大なる山の神」という意味。別名は和多志大神。「わた」は海の古語で、海の神を表す。すなわち、山、海の両方を司る神ということになる。鹿屋野比売神との間に四対八柱の神を産んでいる。



かやのひめ

鹿屋野比売神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。野の神であるとしている。「カヤ」は萱のことである。萱は屋根を葺くのに使われるなど、人間にとって身近な草であり、家の屋根の葺く草の霊として草の神の名前となった。別名の「野槿」は「野の精霊」の意味である。山の神である大山津見神との間に四対八柱の神を生んでいる。



ににぎ

邇邇芸命

天照大神の孫。木花之開耶姫を妻とし、火照命（海幸彦）・火間降命（火須勢理命）、彦火火出見尊（山幸彦）が生まれた。農業の神として信仰されており、霧島神宮（鹿児島県）、高千穂神社（宮崎県）、築土神社（東京都）、射水神社（富山県）、子安神社（三重県）、常陸國總社宮（茨城県）などに祀られている。



このはなさくやひめ

木花咲耶姫

邇邇芸命の妻として、火照命（海幸彦）・火間降命（火須勢理命）、彦火火出見尊（山幸彦）を生む。コノハナノサクヤヒメは木の花（桜の花とされる）が咲くように美しい女性の意味とするのが通説である。姉の石長姫（いわながひめ）は容姿が醜い。



いわながひめ（このはなちるひめ）

石長姫（木花知流比売）

木花開耶姫の姉。岩の永遠性を表すものであり、長寿の象徴。ニニギの元に嫁ぐが、石長姫の容姿は醜かったことから父の元に送り返された。妊娠した木花開耶姫を嫉妬した石長姫が呪い、それが人の短命の起源であるとしている。



ほり

火遠理命（山幸彦）

邇邇芸命と木花咲耶姫との間の子。火の中で生んだ三人の子の末で、火が消えかけた時に生まれたのでホオリ（「ホ」は“火”を意味し「オリ」は“遠い”をいみする）と名付けたとする。兄にホデリ（海幸彦）、ホスセリがいる。神武天皇の祖父に当たる人物。



ほり

火照命（海幸彦）

邇邇芸命と木花咲耶姫との間の子。火がさかんに燃えて照り輝いている時に生まれたのでホデリ（「ホ」は“火”を意味し「デリ」は“照り”をいみする）と名付けたとする。弟にホスセリ、ホオリ（山幸彦）がいる。



とよたまひめ

豊玉姫

火遠理命の妻。海神の娘。浦島太郎の「乙姫様」のモデルという説がある。豊玉姫命という神名は、姿かたちの見目麗しい女性を意味する。聖母神であると同時に、福を招き、出世を約束する女神である。本当の姿は和邇（サメ）である。



あかめ

赤目

山幸彦と海幸彦に登場する赤目。海幸彦の釣針を飲んでしまい、のどに引っかかって取れなくなってしまう。このことが原因で山幸彦と海幸彦が対立してしまう。



さるたひこ

猿田彦命

「鼻長七咫、背長七尺」という記述から、天狗の原形とする説がある。「天地を照らす神」ということから、天照大神以前に伊勢で信仰されていた太陽神だったとする説もある。その異形な風貌から赤鼻の天狗とされるが、仏教、特に密教系の烏天狗と混同されやすい。



とりのいわくすふね

鳥之石楠船神

日本神話に登場する神であり、また、神が乗る船の名前である。別名を天鳥船神（アメトリフネ）という。神名の「鳥」は、船が進む様子を鳥が飛ぶ様に例えたとも、水鳥が水に浮かんで進む様に例えたともされる。「石」は船が堅固であることの意、「楠」は、船は腐食しにくい楠の材で作られていたことによるかとの説が一般的である。



おおくにめし

大国主

須佐之男命の息子。大国主は色々な女神との間に多くの子供をもうけている。子供の数には『日本書紀』には181柱と書かれている。記においては以下の6柱の妻神がいる。妻子の多さは、明らかに大国主命が古代において広い地域で信仰されていた事を意味する。



おもものめし

大物主

大物主は蛇神であり、稲作豊穰、疫病除け、醸造を司る神である。また国の守護神である一方で、崇りなす強力な神ともされている。大物主は、出雲の国造りの大国主大神と同一の神だという説がある。または大国主の幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）であるとも言われている。



きまた

木俣神

大国主命と八上比売との間に産まれた神。大国主命の正妻である須勢理毘売命がすごい嫉妬深く、恐ろしい女神だったので、八上比売は生まれたばかりの木俣神を「木の股」に挟んで置いて実家に帰ってしまう。子供を木の股に挟む意味は、子供の健康を願う儀式とされている。



すせりひめ

須勢理毘売命

スサノオの娘。大国主の正妻。神名の「スセリ」は「進む」の「スス」、「すさぶ」の「スサ」と同根で、積極的な意思をもつ女神の意である。この女神の持つ激情は、スサノオの試練を受ける夫の危機を救うことに対して大いに発揮される。激しい嫉妬をのぞかせ、気が強そうですが、可愛さや、けなげでもあり、元祖ツンデレとも呼ばれている。



あめのかく

天迦久神

大国主のもとに派遣される使者として、天尾羽張神（あめのおはばりのかみ）がつかわされることを同神につたえにいった神。天尾羽張神は、自分の代わりに子の建御雷神（たけみかざちのかみ）をさしだした。迦久は鹿兒（かこ）の意で鹿の神といわれる。



しゅてんどうし

酒呑童子

酒呑童子は、丹波国の大江山、または京都と丹波国の国境の大枝に住んでいたとされる鬼の頭領。酒が好きだったことから、部下たちからこの名で呼ばれた。他の呼び名として、酒顔童子、酒天童子、朱点童子と書くこともある。彼が本拠とした大江山では龍宮のような御殿に棲み、数多くの鬼達を部下にしていた。



いぼらきどうし

茨木童子

酒呑童子とともに京都を荒らした大鬼。実は茨木童子は「男の鬼ではなく、女の鬼だった」という説があり、または酒呑童子の息子、はては彼の恋人だったという説も伝わっている。



おもいかね

思金神

名前の「おもひ」は「思慮」、「かね」は「兼ね備える」の意味で、「数多の人々の持つ思慮を一本柱で兼ね備える神」の意である。思想や思考、知恵を神格化したものと考えられている。「八意」は多くの知恵という意味であり、立場を変えて思い考えることを意味する。高天原の知恵袋といっても良い存在である。



いそたける

五十猛神

須佐之男命の息子。林業の神として信仰されている。また、土の船を作り海を渡ったことから、造船、航海安全、大漁の神として信仰され、商売繁盛、開運招福、悪疫退散、厄除け等の神徳もある。



すくなびこな

少名毘古那

国造りの協力神、常世の神、医薬・温泉・禁厭（まじない）・穀物・知識・酒造・石の神など多様な性質を持つ。酒造に関しては、酒は古来業の1つとされ、この神が酒造りの技術も広めた事と、神功皇后が角鹿（敦賀）より還った応神天皇を迎えた時の歌にも「少名御神」の名で登場する為、酒造の神であるといえる。



みつほのめ

弥都波能売神

神名の「ミツハ」は「水走」と解して灌漑のための引き水のことを指したものと、「水つ早」と解して水の出始め（泉、井戸など）のことともされる。龍や小児などの姿をした水の精であると説明されている。



あまつまら

天津麻羅

日本神話に登場する鍛冶の神である。「神」「命」などの神号はつけられていない。アマツマラという神名のうち、「アマツ」は天津神を示すものであるが、「マラ」は「めうら」すなわち片目の意で、鍛冶が鉄の色でその温度をみるのに片目をつぶっていたことからとする説がある。『日本書紀』に登場する天目一箇神と同一神であるとも考えられる。



くしなだひめ

櫛名田比売

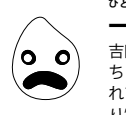
ヤマタノオロチ退治の説話で登場。ヤマタノオロチの生鬚にされそうになっていたところを、スサノオにより姿を変えられて湯津爪櫛になる。スサノオはこの櫛を頭に挿してヤマタノオロチを退治する。神名の「クシ」は「靈妙、素晴らしい」、続く「ナダ」は稲田を表す言葉であり、クシナダヒメとは豊かな稲田を象徴する女神とも言われる。



うさぎ

兎神（因幡の白兔）

因幡の白兔（いなばのしろうさぎ）とは、日本神話に出てくる兎、または、この兎の出てくる物語の名。『古事記』では「稻羽之素兔」と表記。因幡の白兔はワニに襲われた哀れな小動物ではなく、兎神という神様。白兔、大兎といった名前で神社に祭られている。



ひとことめし

一言主

吉凶を一言で言い放つ託宣の神である。葛城神、葛城一言主神等の異名を持ち、「いちごんさん」と呼ばれ、一言であればどんな願いでも叶える神として古来から信仰されていた。その参拝は願いを一言だけ口にする事が許されていることから「無言参り」とも呼ばれた。



いなせはぎ

稲脊脛命

鳥根県伊奈西波岐神社の御祭神。出雲国造の祖神、天穗日命の御子。国譲りの神勅を大国主大神に伝えた時、稲背脛命が使いに出され、事代主命を呼び還し国譲りについての諾否を問い、国譲りが武力によらずして平和裡に解決された事は、稲背脛命等の奔走の賜であり、その功績は大きいといえる。



さほひめ

佐保姫

春の女神。白く柔らかな春霞の衣をまとう若々しい女性と考えられ。この名は春の季語であり菓子の名前にも用いられている。



たつたひめ

竜田姫

秋の女神。鮮やかな緋色や黄金の秋の草木の錦を纏った妙齡の女性として想像される。竜が裁つに音が似ているため裁縫の神としても信仰される。



しにかみ

死神（伊邪那美命）

人間を死に誘う、または人間に死め気を起こさせるとされる神。日本神話において伊邪那美命が人間に死を与えたとされており、伊邪那美命を死神と見なすこともある。



どうそじん

道祖神

路傍の神。集落の境や村の中心、村内と村外の境界や道の辻、三叉路などに主に石碑や石像の形態で祀られる神。松尾芭蕉の「奥の細道」では旅に誘う神様として冒頭に登場する。村の守り神、子孫繁栄、近世では旅や交通安全の神として信仰されている。古い時代のものは男女一対を象徴するものになっている。



やつのかみ

夜刀神

蛇体で頭に角を生やした神で、その姿を見た者は一族もろとも滅んでしまうと伝えられていた。夜刀神の「夜刀（やつ・やと）」「谷（やつ）」を意味し、文字通り谷や葦原などの人による開拓以前の野生状態の自然を可視化したもの、自然の持つ霊威を形象化したものである。



しじん・せいりゅう

四神 - 青龍 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。東方青龍。東方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。



しじん・ひやく

四神 - 白虎 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。西方白虎。西方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。



しじん・すざく

四神 - 朱雀 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。南方朱雀。南方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。



しじん・げんぶ

四神 - 玄武 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。北方玄武。北方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。



オホホ

西表島の千立地区の節祭（しちまつり）に登場する人気者。悪い神様とされており、オホホホホ〜と奇声を発しながら札束を見せびらかし、観客たちに取り入ろうとしたり、ミルク様の子供を誘ったりするとか。



パントウ

パントウは、沖縄県宮古島で行われる悪霊払いの伝統行事。1993年に重要無形民俗文化財に指定された。厄払いには誰彼かまわず人や新築家屋に泥を塗りつけて回るといふもので、泥を塗ると悪霊を連れ去るとされている。



ミルク

ミルク行列や弥勒節を踊るときにかぶられる面。『ミルク』は、『ミロク』が沖縄方言に変化したもので、『弥勒』のこと。東方の海上から神船に五穀の種を積んでやってきて豊穡をもたらす来訪神とされている。



アンガマ - ウシュマイ -

石垣地方で受け継がれる『アンガマ』は、あの世からの使者であるウシュマイ（お爺）とウミー（お婆）が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問し、珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する伝統行事。そのときかぶる木製の面が『アンガマ面』。



アンガマ - ウミー -

石垣地方で受け継がれる『アンガマ』は、あの世からの使者であるウシュマイ（お爺）とウミー（お婆）が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問し、珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する伝統行事。そのときかぶる木製の面が『アンガマ面』。



ダートウダー

小浜島の民俗芸能で、4人が黒い面を被って登場し、歌声に合わせているるな所作を見せる。歌詞も、その所作の意味も解明されていない。それを踊る者は貧しい者とされていたため、だんだんと嫌がられるようになり、この踊りは廃止された。ところが近年、その歌と踊りが見直されるようになった。



マユンガナシ

八重山諸島の石垣島川平（かびら）に伝わる節祭（せちえ）にはマユンガナシという神が登場する。「マユ」とは「豊かな真の世」のことである。「ガナシ」は敬称。で、あわせて「真世の皆様」という意味である。石垣島ではマユンガナシの登場を境にして「節」が改まるとされ、これを「初正月」と呼んでいる。



スネカ

田舎裏やコタツに入ってばかりいて怠けて入る者の脛に付いた火の斑を剥ぎ取ってしまう、といった意味の「脛皮たくり」が「スネカ」の語源と言われている。岩手県大船渡市三陸町吉浜で、毎年1月15日に行われる恒例行事。2004年に重要無形民俗文化財に指定された



なまはげ

冬に田舎裏にあたっていると手足に「ナモミ」「アマ」と呼ばれる低温火傷ができることがあり、“それを剥いで”怠け者を懲らしめ、災いをはらい祝福を与えるという意味での「ナモミ剥ぎ」から「なまはげ」と呼ばれるようになった。「男鹿のナマハゲ」として、国の重要無形民俗文化財に指定されている。



かまどがみ 竈神

火の神であると同様に農業や家畜、家族を守る守護神ともされる。竈は座敷などと比べて暗いイメージがあることから、霊界と現世との境界を構成する場所とし、かまど神を両界の媒介の役割を持つ両義的な神とする考え方もある。また、性格の激しい神ともいわれ、人に祟りをおよぼすとの伝承もある。



りょうおう 陵王

獅子舞のルーツとも言われている舞楽面陵王。中国古代の英雄で、軍略家として有名な軍人蘭陵王はその容姿があまりに優美だったので、戦場で敵を驚かすために、わざと恐ろしい面をかぶり、自ら作曲した『蘭陵王入陣曲』を演奏しながら出陣したといわれている。
※日本の神々シリーズですが、獅子舞のルーツということで採用しました。



しんとりそ 新鳥蘇

雅楽、舞楽の曲名。この舞を踊る時に付けるお面。柔和な表情の人面をつけ、この舞にだけ用いる特殊な冑（かぶと）をかぶり、太刀を腰に、笏を手にもって舞う。春日大社に収められている舞楽面新鳥蘇は平安時代後期の作で国の重要文化財でもある。
※雅楽（ががく）は、中国、朝鮮半島を経て、日本で花開いた伝統的な音楽の一つ



つつひめ 筒姫

夏の女神。筒姫に関する謂われは不明な点が多い。陰陽五行説から、夏は南になりますが、平城京の南にある夏の象徴となる地理的な名所もよく分かっていない。一説によると、平城京の南には古墳時代、筒形銅器と呼ばれる用途の不明である副葬品が造られ、古墳を飾ったことから筒姫という名になったという。



みつね 狐

狐は古来より日本人にとって神聖視されていた。江戸時代に入って稲荷が商売の神と公認され、大衆の人気を集めるようになると、稲荷狐は稲荷神という誤解が一般に広がり、またこの頃から稲荷神社の数が急激に増え、流行神（はやりがみ）と呼ばれる時もあった。



ためき 狸

日本の狸は古来から森羅万象を司るものとして神格化されていた。しかし仏教伝来後は、神の使いとされる狐や蛇などの動物以外は神格を失い、特別な能力を持つ獣というイメージだけが残された狸は、悪しき者または妖怪とみなされ、神秘的で恐ろしいイメージを持たれるようになった。



てんく 天狗

天狗は、日本の民間信仰において伝承される神や妖怪ともいわれる伝説上の生き物。一般的に山伏の服装で赤ら顔で鼻が高く、翼があり空中を飛翔するとされている。俗に人を魔道に導く魔物とされ、外法様ともいう。また後白河天皇の異名でもあった。



からすてんく 烏天狗

烏天狗は、大天狗と同じく山伏装束で、鳥のような嘴をした顔、黒い羽毛に覆われた体を持ち、自在に飛翔することが可能だとされる伝説上の生物。小天狗、青天狗とも呼ばれる。仏法を守護する八部衆の一、迦楼羅天が変化したものともいわれている。



ほんにゃ 般若

「嫉妬や恨みの籠る女の顔」としての鬼女の能面。一説には、般若坊という僧侶が作ったところから名がついたといわれている。あるいは、『源氏物語』の葵の上が六条御息所の嫉妬心に悩まされ、その生霊霊にとりつかれた時、般若経を読んで御修法を行い怨霊を退治したから、ともいわれている。



こおもて 小面

小面の「小」は小さいという意味ではなく、可憐さ、雅やかさ、初々しさなどを意味する。女性の美しさを端的に表現した面である。



ひよっとこ

ひよっとこの語源はかまどの火を竹筒で吹く「火男」がなまったという説や、口が徳利のようであることから「非徳利」からの説もある。出雲の国はかつて製鉄が盛んであり、その砂鉄採取が所作の源流とされ、炎と関係の深い金属精錬神への奉納踊りの側面もあった。



おおかみ 狼（大神）

日本では関東・中部地方において秩父の三峯神社や奥多摩の武蔵御嶽神社でオオカミを眷属として祀っており、山間部を中心とした狼信仰が存在する。オオカミを「大神」と当て字で表記していた地域も多く、アイヌではエソオオカミを「大きな口の神」「狩りをする神」「ウオーと吠える神」などと呼んでいた。



おなます 大鯨

地下に棲み、身体を揺るり地震を引き起こすとされる。琵琶湖にある竹生島神社には鯨が龍に変身して島と神社を守るといふ言い伝えがある。群馬県前橋市の清水川にはオトボウナマスという主が、釣り人を追いかけるという説話がある。熊本県阿蘇市の阿蘇神社の氏子は鯨を神の使いとして信仰し、捕獲食用はタブーとされている。



みしゃくじさま ミシャグジ様

日本古来の神。疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを防ぐとされる神である。縄文時代の遺跡からミシャグジ神の御神体となっている物や依代とされている物と同じ物が出土している事などから、この信仰が縄文時代から存在していたと考えられている。



ヨッカブイ / 大ガラッパ

ヨッカブイは「夜着被り」のことで、ガラッパ(河童)相撲を取る子供たちのそばで、シユロの仮面を被った青年の大ガラッパが、笹の葉で観客をおはらいし、悪い子供たちを諭す、水神祭りの伝統行事です。相撲基句 18 番を踊ることから「高橋十八度踊り」とも呼ばれます。国選択無形民俗文化財「ヨッカブイ」。



アラハバキ

『記紀』および『土記』などにはまったく登場しない謎の神であり、解釈は研究者において実に様々である。検索をかけたところ、【アラハバキは、日本の民間信仰的な神の一種。現在、公的な観光案内類を含め、源流を辿ると偽書である『東日流外三郡誌』に由来する記述が見られることがあり、非常な注意を要する。】と出てくる。



うつひめ 宇津田姫

冬の女神。宇津田姫に関する謂われは筒姫同様、不明な点が多い。陰陽五行説によれば、冬は北。宇津田という漢字表記の地名は日本には存在しない。一説によると、奈良の北、京田辺市に打田（うつた、うった）という地名があり、宇津田姫の名前の由来とされている。



ふうじん

風神

風の神、風を司る神。風の精霊、或いは妖怪をそう呼ぶこともある。また対になる存在として、雷神がある。デザインの元となった俵屋宗達の作品『風神雷神図屏風』は多くの画家が模写し、尾形光琳、酒井抱一の二作品も有名。



らいじん

雷神

雷の神、雷を司る神。「雷様」「雷電様」「鳴神(なるかみ)」「雷公(らいこう)」とも呼ばれる。また対になる存在として、風神がある。デザインの元となった俵屋宗達の作品『風神雷神図屏風』は多くの画家が模写し、尾形光琳、酒井抱一の二作品も有名。



あめのこやね

天兒屋命

岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の邇邇芸命に随伴し、古事記には中田連の祖となったとある。名前の「コヤネ」は「小さな屋根(の建物)」の意味で、託宣の神の居所のことと考えられる。



ふとだま

布刀玉命

岩戸隠れの際、思兼神が考えた天照大神を岩戸から出すための策で良いかどうかを占うため、天兒屋命とともに太占(ふとまに)を行った。そして、八尺瓊勾玉や八咫鏡などを下げた天の香山の五百箇真賢木(いおつまさかき)を捧げ持ち、アマテラスが岩戸から顔をのぞかせると、アメノコヤネとともにその前に鏡を差し出した。



やまたのおろち

八俣遠呂智

「ヤマタノオロチ」という名称の意味は諸説ある。「オロチ」の意味として、「お」は峰、「ろ」は控尾語、「ち」は霊力、また霊力あるものとする説もあるが、蛇の古語である「ミツチ」や、ヤマカガシを古来「ヤマカガチ」と呼ぶなどのように、「ち」とは蛇の意味とする説もある。本来は山神または水神であり、八岐大蛇を祀る民間信仰もある。



やがみひめ

八上比売

因幡国八上郡の姫。大国主の最初の妃。大国主との間に木保神をもうける。八十神のプロポーズを断って、大国主と結ばれたはずの八上比売う。八上比売のほうが先に結婚したと言うのに、須佐之男命の娘須勢理毘売命を正妻とされ、しかも異常に嫉妬深い須勢理毘売命を恐れて、子供(木保神)を置いて実家に帰ってしまう。



たよりわけ

建依別

土佐の国の神。現在の高知県の神様。タケヨリワケというは男性の名前で、普通に考えると、「タケ」は強いで、「強い男性」というニュアンスだが、伊予之二名島(四国)の他の神の名前が皆、「食料」に関わっていることを考えると、「タケヨリワケ」の「タケ」は「竹」か、他の何かの食料の名前ではないかと思われ。



いよりひこ

飯依比古

讃岐の国の国の神。現在の香川県の神様。イイヨリヒコという名前は穀物(=飯)がたくさんある。集まるという意味。



おおげつひめ

大宜都比売

阿波の国の神。現在の徳島県の神様。名前の「オオ」は「多」の意味、「ゲ」は「ケ」の食物の意味で、穀物・食物・蚕の女神である。



えひめ

愛比売命

伊予の国の神。現在の愛媛県の神様。愛比売命は伊予の国にやどる女神。可愛い姫、美しい姫という意味。



ととり

鳥取神

鳥取県の元ネタとされる。大国主命の妻。鳥というのは「白鳥」のこと。白鳥は真っ白で、死者の霊であり、同時に「穀物神」でもあった。古代では鳥取部という部民がいて、水鳥を捉える職業である。神聖な職業とされていた。ちなみにヤマトタケルは死後に白鳥になっている。



おおことおしお

大事忍男神

イザナギとイザナミが国産みを終えて神産みの最初に産んだ神である。「大事を終えた男神」として、国産みという大仕事を終えたことを表した神名であると解釈されることが多い。



いわたつひこ

石土毘古神

家宅六神の中で最初に産まれた神。家の材料である石と土(壁土)を表している。全国的には殆ど知られておらず、祭祀としている神社も全国で愛媛県西条市にある石鎚神社のみとなっている。また、石鎚神社は西日本最高峰の山である石鎚山をご神体としており、周辺地域の人々を守る地主神であったのではないかとも言われている。



いわずひめ

石巢比売神

家宅六神。二番目。石巢は石砂のことであり、砂を司る神であるとしている。石土毘古神の対の神として女神とされたものと考えられる。おそらくは兄妹であり夫婦でもあると思われる。古事記にしか登場しない。



おおとひわけ

大戸日別神

家宅六神。三番目。「大戸」は家の出入口のことである。性別は不明である。門の神の一つであるとしている。古事記にしか登場しない。



あめのふきお

天之吹男神

家宅六神。四番目。「吹」は屋根を葺く動作を表す。屋上の神としている。神の順番を考えると、地盤→土→砂→戸・出入り口→屋根、と下から順番に生まれていると解釈できる。古事記にしか登場しない。



おおやびこ

大屋毘古神

家宅六神。五番目。葺き終わった屋根を表す。別名、禍津日神(まがつひのかみ、まがついのかみ)、災厄を司る神としている。家屋の神で、大屋津姫命(オオヤツヒメ)と対になっていて、爪津姫命(ツマツヒメ)と合わせて3柱で紀伊国に祀られている。



かざもつわけのおしお

風木津別之忍男神

家宅六神。最後に産まれたのが風木津別之忍男神(かざもつわけのおしおのかみ)である。暴風から家を守る神として、家宅六神の最後に入れられたものと考えられる。



おおわたつみ

大綿津見神

海の神のこと、転じて海・海原そのものを指す場合もある。イザナミ、イザナギの二神の間に生まれた。神名から海の主宰神と考えられている。豊玉姫の父。



とようげひめ

豊宇気毘売神

豊受大神宮(伊勢神宮外宮)に奉祀される豊受大神として知られている。神名の「ウケ」は食物のことで、食物・穀物を司る女神である。後に、他の食物神の大気都比売(おほげつひめ)・保食神(うけもち)などと同様に、稻荷神と習合し、同一視されるようになった。



はやあきつひこ

速秋津日子神

古事記では別名水戸神(みなとのかみ)と記している。イザナギ・イザナミ二神の間に産まれた男女一対の神で、水戸神はその総称である。水に関係のある神である。



はやあきつひめ

速秋津比売神

古事記では別名水戸神(みなとのかみ)と記している。イザナギ・イザナミ二神の間に産まれた男女一対の神で、水戸神はその総称である。水に関係のある神である。

2019 NEW KAMISAMA

だいこくてん 大黒天



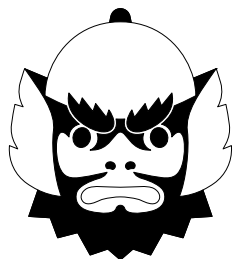
打ち出の小槌と大きな袋を抱える農業の神様。ヒンドゥー教の神様であり、創造と破壊を司るシヴァ神の化身であるマハーカーラという神様に由来している。マハーカーラが日本に伝来した後、大国主命と一体化して誕生したといわれる。大黒天の持つ打ち出の小槌は、振ることにより人々に富をもたらすとされている。

えびす 恵比寿



イザナミ・イザナギの間に生まれた子供「蛭子」(ヒルコ)もしくは大国主の息子である「事代主」(コトシロヌシ)などを祀ったもので古くは「大漁追福」の漁業の神である。時代と共に福の神として「商売繁盛」や「五穀豊穡」をもたらす神となった。唯一日本由来の神である。

びしゃもんてん 毘沙門天



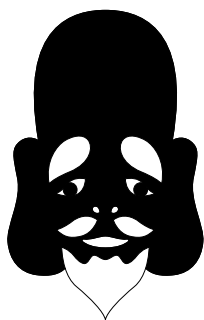
鎧を身につけ矛を携えた姿が特徴的であり、財宝を守る神様。ヒンドゥー教の財宝神であるクベーラが前身であり、当初は戦闘的イメージなく、中国に伝来する過程で、武神としての信仰が生まれ、その後日本に伝わったとされる。そのため、現在のような武神として描かれるようになった。

べんざいてん 弁才天



琵琶を奏でる姿で描かれる女神。ヒンドゥー教の水神サラスヴァティーに由来している。大河の雄大さを表す神様として描かれていたが、水の流れる音が、まるで音楽を奏でているようだという連想から音楽の女神としても信仰されるようになった。「才」という読みが「財」に通じることから、財宝をもたらすとも言われる。

ふくろくじゅ 福祿寿



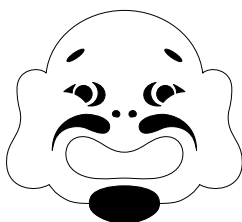
福祿寿は、寿老人の同体異名とされており、中国人が人生の三大目標として掲げる福(幸福)、祿(身分、財産)、寿(健康、長寿)のすべてを兼ね備えた神様とされている。白いヒゲをたくわえ、縦長な頭が特徴的であり、長い杖を持っている。さらに、福・祿・寿のすべてを兼ね備えた者は、徳も備えていることから、人徳の神様としても有名。

じゅろうじん 寿老人



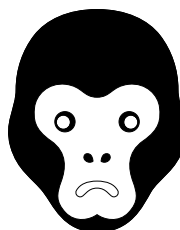
白く長いヒゲを生やし、頭巾をかぶり、長い杖と巻物を持った仙人のような姿で描かれることが多い。ももとは、中国の道教の神様で、「生」を司る南極老人星(カノープス)の化身とされている。寿老人は、日本に伝来した際に仏教の神様などと結びつかず、中国でのイメージがそのまま生かされた姿で描かれている。

ほてい 布袋



布袋は、実在した人物であり、中国の契此(かいし)という僧がモデル。大きな袋を背負い、杖を持ち、いつも人々からの施しを求めて、各地を旅していた。布施を受けた際に、その人の吉凶を占い、百発百中で当たっていたことから、超能力者として一目置かれる存在であった。人徳、福運などのご利益があるとされている。

しょうじょう 猩猩



七福神は、江戸時代にはほぼ現在の顔ぶれに定まったものの、寿老人と福祿寿はともに本来同一のもののみならず、寿老人の代わりに猩猩が入られることがあった。猩猩祭りは旧東海道鳴海宿を中心とした地域で行われる。猩猩人形が子供達を追いかけ、大きな赤い手でお尻を叩こうとする。叩かれた子は夏病にかからないという。